HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『ローマ書』講義：『ローマ書』における神とひとの信実
Author(s)	千葉, 恵
Citation	無教会全国集会2006さっぽろ：無教会の源流を求めて―札幌バンドの信仰とその系譜―, pp.29-37
Issue Date	2007
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/20503
Type	proceedings (author version)
File Information	proceeding.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『ローマ書』講義

『ローマ書』における神とひとの信実

（無教会全国集会 2006 さっぽろ　2006 年 9 月 10 日聖書講義）

千葉恵

はじめに

おはようございます。ようこそ無教会の源流を尋ねて札幌にいらっしゃいました。心から歓迎いたします。今、遠くは韓国、沖縄から全国津々浦々から縁もゆかりもない私どもがこの世から召しだされ、一つ所におりますのはただイエス・キリストの出来事の故にです。彼だけが私どもを結び付けています。共に今ここで歴史の最前線で神に感謝し憐れみを請い、栄光を帰すべくエクレシアを形成しています。この世から一時的に退避し、キリストを介してだけ交わりの作られる神の国とはどのようなところであるのか、その予行演習を行っています。今日ここに集まるに至りますまで、黒田清隆の友人駐米大使森有礼の書生がたまたまアマーストの学生になり農科大学のクラーク先生と知り合ったように、何らかの出会い、ひとや書物との出会いがあったはずです。そしてその連鎖の端に、ここに一つの集会が形成されています。昨日、札幌バンド、独立教会の歴史そして『後世への最大遺物』の翻訳を通じて注がれた数々の恩恵を伺いました。私も賜った恩恵と数においてそれに足らない罰について語りたいとも思いますが、十字架につけられたキリストのことだけをお伝えしたいと思います。

「ローマ書」の思考様式とその意味論的分析

ここでは無教会の源流を訪ねて、地中海世界、コバルトブルーの海と空そして乾いた大地、ローマおよびコリントまで2000年遡ります。言ってみればローマ帝国を素手で滅ぼし、世界を改造し続けた「ローマ書」の力の秘訣はどこにあるかを語りたいと思います。手紙は５５年ころコリント周辺で口述筆記されています。「ローマ書」におけるパウロの思考様式は特徴的で、人類にとって比類なきことが出来事になったその福音に眼差しを注ぎつつ、イエス・キリストの出来事を宣教するなかで、それと同時にユダヤ主義者等を彼らが依拠する旧約聖書を引用しつつ論駁しています。ユダヤ主義者は律法を軽視すると彼らの考えるパウロの思想「信仰義認論」によれば、神は義ではなく不義となるのではないかと主張していました。また、神がヤコブを愛しエサウを憎んだのなら、神の側に不正があるのではないか、誰が神の意志に反抗しえたのか等、彼らとの長年の論争を背景に、パウロは福音の宣教と同時に神が義であることそして福音が何であるかを論証しています。宣教そのものが同時に論駁になっているのです。なぜなら、イエス・キリストの出来事は律法による支配を終わりにし、異邦人にもユダヤ人にも開かれた救いの訪れだからです。

さらに異邦人にも福音がいかなるものであるか理性でも分かるように、神の人間認識、イエス・キリストへの注視を一旦括弧にいれて、ギリシア人はじめ自由と責任のもとにある人間に眼差しを注ぎつつ、「われ汝らの肉の弱さの故に人間的なことを語る」として、ひとつの言語空間を形成しています。「言語空間」とは例えば「バス」という語の意味を知っているひとは、「道路」や「信号」その他一連の語句の意味をも知っておりそこで織り成される言語の網の目のことです。パウロの思考様式は人類にとって比類なき出来事がおこったその事実に眼差しを注ぎつつ、そこから一切を思考し直し、考え抜いており、一見矛盾に見える発言も、言語の層を異にし、無矛盾な思考が「ローマ書」において展開されています。この「人間的なことを語る」共約可能な言語網を形成する理由となる「肉の弱さ」における「肉」とは身体を伴った人間の自然本性上の生の原理のことを言い、それはそのまま弱いものと認識されています。「肉の弱さ」とは自らの身体の限界が自己の限界であると思いがちな身体を伴った人間の傾向性のことであり、イエス・キリストにおいてある神の前の自己の現実を自らのものとして認識できないところにあると言えます。この言語空間においては、命令形を取る場合が多く律法を新たに語っているとも見えますが、あの十字架と復活の出来事の故に、命令を語りうることそれ自体が喜びなのです。他方、命令形を語るということ自体、相手が従わないことがありうることを前提にしています。これは文法上、文体上から来る制約です。

私は文体の分析など、解釈学的営為以前に言葉それ自身の意味論的分析をしてみまし

た。解釈というのは「地平融合」と言いまして、テクストと読み手のあいだの距離を縮める作業です。パウロが言葉を話すとき、それらの言葉の彼自身の先行理解はどこに由来するのかなど宗教的、歴史的、社会的、政治的背景を研究することに勢をだし、２千年の距離を埋め双方の「魂の調和」を求めます。しかし、パウロ自身「われらは、汝らが読み、しかも理解することがらの他何も書いてはいない。汝らが完全に理解してくれるよう、われ望む」と述べているように、彼の先行理解を無視して、与えられたテクストの言語の文法および文体の分析を行ってみました。法（例、命令法、条件法）、時制、固有名の機能などを調べてみますと、彼がそこに眼差しを注いで言葉を紡ぎだす実在の層が少なくとも三層あることが判明しました。言葉の網がその実在に沿って三層あり、それらは相互に相対的に独立しています。(1)ひとつはイエス・キリストにおいて切り開かれた神と人間の新しい現実、つまり神にイエス・キリストにおいて理解されているご自身とひと双方の信実と義が啓示されている実在の層です。(2)もうひとつは律法のもとにある人間の現実、つまり神により律法を通じて理解されているご自身と人間が啓示されている実在の層です。双方とも神の前の現実、つまり神により認識、判断、啓示されているご自身と人間認識の現実です。(3)第三は神への言及なしに、パウロがローマの信徒に代表される生身の人間に語りかけるさいにパウロにより理解されている人間現実の層です。これは各自が自由と責任のもとに生きている層であり、他の文化圏のひとびととも共約可能ないわゆる学問により研究される罪でも義でもない人間と言え、彼はそのような生身の心身に眼差しを注いでいます。これはパウロによりひとの「肉の弱さ」の故に譲歩として認められている層です。

「信仰義認論」とはいかなるものであったのか

この書簡の文体分析の助けを得て、信仰義認論をあらたに吟味してみました。信仰義認論は行いはなくとも信仰だけで、罪赦され義とみなされそして律法を確立すると一般的に理解されています。信仰にはどんな魔法が隠されているのだろうと長年不思議でした。禅の世界ではマジックがないとわかること、それが悟りです。マジックを求めて座りにくるひとに禅僧は「朝ごはんを食べたか」「掃除をしたか」と聞くのだそうです。地に足がつくということが禅では悟りなのだそうです。私のように、クリスチャンホームで無教会の伝統のなかで「お恵みによる」と言われつつ育つ者にありがちな傾向として、自らが自由と責任のもとに地に足をつけて信じて生きるという自覚が薄くなりやすいのです。ようやくパウロのなかに「信仰」「信実」と翻訳される「ピスティス」に二つの意味、二相あることが分析することができ、地に足が付く経験をいたしました。ようやく、神学と私の専門である哲学の連結点を見つけることができました。

信仰義認論は今日の当該箇所 3.21-31 で展開されています。その試訳は以下のものですが、これは神の前のイエス・キリストにおいて理解されている人間現実という実在の層を表しています。「[21] しかし、今や、律法なしに、神の義が明らかにされている、それは律法と預言者たちにより証言されているものであるが、[22] 神の義はイエス・キリストの信実を通じて信実であるすべての者に明らかにされている。というのも、[信実であるすべての者のあいだに]何ら差異は存在しないからである。[23] なぜなら、すべての者は、罪を犯したのであり、そして神の栄光を欠いているが、[24] キリスト・イエスにおける贖いを通じてご自身の恩恵により無償で義とされる者だからである。[2526] 神は彼をその信実を通じて彼自身の血において償いとしてご自身の義の証示のために公に晒したが、それは、先に生じた諸々の罪に対する神の忍耐における軽減を介して、今という好機にご自身の義の証示に向けて、ご自身が義であり、さらにイエスの信仰に基づく者を義とするためである。

[27] それでは、誇りはどこにあるのか。排除されてしまった。どのような律法を介してか。業のか。そうではなく、[神の]信実の律法を介してである。[28] なぜなら、われらは、ひとは律法の業を離れて[イエス・キリストの]信実によって義とされると考えるからである。[29] それとも神はユダヤ人だけのものであるのか。そうではなく異邦の民のでもあるのか。そのとおり、異邦の民のでもある、[30] いやしくも神はひとりであり信仰に基づく割礼者を、そしてその[イエス・キリストの]信実を通じて無割礼者をも義とするであろうなら。[31] それでは、われらはその[イエス・キリストの]信実を通じて律法を無効にするのか。断じて然からず。むしろわれらは律法を確立する」。

「ピスティス」には二つの意味があります。ひとつはルターが「キリストの信 Fides Christi」と言ったところのイエス・キリストにおいて出来事になった神とひと双方の信実です。これはナザレのイエスの信仰による生涯は神の前に罪なきものであり、すべての罪びとの罪を担わせうるという意味で神に「よし」とされる信仰・信実です。イエスにおいては彼自身のひととしての心的状態は常に神の前で「よし」とされる信実なものだったのです。だからこそ全人類の罪を担い、律法のもとに生きていないにもかかわらず、律法のもとに生きるひとりびとりの代わりとなり、「贖い」「贖罪」の死を遂げることができました。ルターは贖罪の事実をこう述べます。「神はおのれの独子を十字架につけ、次のように宣告した。汝はリンゴを食らいしアダムなり、汝は姦淫者ダビデなり、汝は涜神者パウロなり、汝は拒否せるペテロなり、汝はあらゆる罪を犯せるあらゆる者なり」。神はひとの不義を一度限り彼において罰したのです。そして、御子の信実な生の故に、「イエスの信仰に基づく」と神によりみなされるひとは「無償で」恩恵として神から義を賜るのです。この箇所で私ども生身の人間の心的状態は問題になっていません。「(信実であるすべての者のあいだに) 何ら差異はない」と言われています。マ

ザーテレサとヒトラーのあいだに何ら差異がないところのピスティス（信実・信仰）がここでは問題になっています。第三の現実、生身の心的状態においては、信仰に「強弱」「成長」があることをパウロは認めています。しかし、ここでは神の前のイエス・キリストにおいて開かれた第一の現実が展開されており、ピスティスは「イエス・キリストの信実」として啓示されています。

パウロが「油注がれた者」という職名を伴った固有名「イエス・キリスト」を用いるときは、「イエス」や「キリスト」と異なり行為主体としては描かず、常に場所や媒介の前置詞「において」や「通じて」等と共に、出来事の範疇のなかで理解しています。神でもひとでもある存在者に一つの行為を帰属させることができなかったからです。「神の義[神が義であること]はイエス・キリストの信実[直接的には神の信実とそれに対応する神に「よし」とされる間接的にはひとの信実双方]を通じて、信じるすべての者に明らかにされている」。ここで「すべてのひと」ではなく「信実であるすべての者」とあるのは「泳ぐ」ということは「水」なしに理解されないように、神の信実は信じるというひとの信実なしには理解されないことからくる、神の前の現実を表現する語用上の制約です。どれほど強い信仰を持てば、「信実であるすべての者」のなかに入るのかはここでは問題になっていません。私自身かつて見失われた者として、神に見捨てられているのではないかという恐れのなかで血まなこになって信じる者「すべて」という語を探したことを想起します。人間の生身の心的状態がそれに伴ってもよいのですが、ここではイエス・キリストにおいて出来事になった信実とそれに対応する神によしとされるひとの信仰・信実が問題になっており、心の状態そのものは問題にされていません。

この箇所は神の前のこのような現実でありますので、従来の「イエス・キリストが持った信仰を通じて」という主格的属格の理解は「イエス・キリスト」を行為主体として理解しているので採用できません。さらに従来の「イエス・キリストへの信仰を通じて」という目的的属格の理解もひとの持つ心的状態としての信仰が「通じて」という仕方で神の義の啓示の媒介にはなりえないので採用できません。さらに、この理解によれば、「信じるすべての者」という仕方でひとの信仰が二度言及されることになり不自然です。ただし、ルターのように「信じることは信じせしめられることだ」という仕方で常にキリストの介入を読み込むなら、かろうじて拡大解釈として許されるとも言えます。しかし、このような理解ですと、「すべては神から出で、神に帰る」以上、鉛筆一本について語ることが間接的に神について語ることとなり、宗教言語の荒唐無稽性が指摘されることになるでしょう。過剰な解釈を避けるためにも、意味論的制約をしっかり押さえておく必要があるのです。

さらに「神の義」の理解も同様です。これはまず「神が義である」という意味で主格

的なものとして読まねばなりません。「神から由来する義」という創始の属格の理解も派生的な解釈として許されるということ以上のものではありません。ルターは「神の義」を神から賜る義として理解することにより天国の門が開けるように感じたと言います。これは解釈として許されますが、まず神が義でなければ、ひとを義とすることはできないことを押さえておかねばなりません。矢内原先生が「神の義」は神の「道徳的完全性」と「恩恵」双方を意味すると言うときも、ただちにはそれにより神がひとを審判するその義とそれにより神がひとを赦すその恩恵としての義は繋がりません。怒りをもって「審判する」ことと憐れみをもって「赦すこと」は通常の理解では対立する意味を持つからです。「贖罪」を媒介にしてだけ多くの言葉を費やすことによりかろうじて繋がります。パウロはきちんと当該箇所でまず神が義であることの論証にむかいます。イエス・キリストの信実が出来事になったことの故にまず神が義であることを示し、そして信じる者すべてを無償で義とすると議論を展開しています。語の意味の理解の段階、局面をないがしろにしないことが重要です。マジックになってしまいます。

パウロはこの神の前の私どもの現実を、「われらがまだ罪人であるときに、和解させられた」と過去形で表現します。古い自己は「共に十字架につけられてしまった」とし既に死んだ者として理解されています。新しい自己は復活のキリストの生において理解されています。「生」「死」の意味が神の前では、生身の生物的な「生」「死」と意味を異にしています。そのように「信実・信仰」も神の前で理解されているそれと、何らかの人間的な規準で認識される成長や強弱の帰属する信仰は異なる意味を持ちます。パウロはその二つの自己を架橋するものとして、命令形で「汝が汝自身の側で持つ信仰を神の前で持て」と勧めます。ですから、信じることは実質的であり、弱かったり強かったりする生身の心の状態のなかで仰瞻（ぎょうせん）するのです。

律法の終わりとしてのイエス・キリストの出来事

この生身の自己はイエス・キリストのもとにも、律法のもとにも生きることのできる独立的な中立的存在です。しかし、神の前に中立的な存在者はいるでしょうか。恐らく神の前にはひとは義人か罪人かでしかないでありましょう。寛容と忍耐をもって悔い改めを待っておられることでしょう。イエス・キリストの出来事がなかったら、わたしどもは律法のもとに生きざるをえず罪に定められているのです。「義人はいないひとりもいない。悟りある者はいない・・あらゆる者は迷い出た、・・彼らの喉は開いた墓であり、彼らの唇には蝮の毒がある。彼らの口は呪いと辛辣で満ちている。彼らの足は血を流すに急であり、平和の道を知らない」。誰もが律法を守りえなかったことが歴史的に立証されています。

パウロはモーセ律法のもとにあるひと以外の、すべてのひとの心に「律法の業が書き

込まれている」と言います。そして終わりの日に、自らの良心が証人となり弁明したり告発したりしながら、神の前で律法の業に基づき審判を受けます。ですから、誰にも自分はモーセ律法を知らないなどという弁解の余地がないのです。「ひとよ、すべて裁く者、汝には弁解の余地がない。なぜなら、汝は他人を裁くそのことがらにおいて、汝自身を罪に定めているからである。というのも、汝裁く者は同じことを行っているからである」。ここで同じことを行っているというのは、通常、他人の欠点が気になり自分が他人にあてがう物差しは、自分にもその欠点があるからだという仕方で説明されます。「先生、A 君よそみしています」「B 君、どうして君は A 君がよそみしていると分かるのかね」と。しかし、より根源的には物差しをあてがいあうということは律法のもとに生きているということです。律法のもとに生きるなら、そのひとは「律法全体を満たす義務がある」のです。そして「律法を行う者たちが義とされる」のであり、「神はおのおのにその業に応じて報いる」のです。学者は信仰義認論の教説の一つの重要な箇所である「働きのない者であり、不敬虔な者を義とする方を信じる者には、彼の信仰が義とみなされる」という「ローマ書」の一節と同じ書簡のなかでのこれらの発言が矛盾するように見え、「パウロを精神分裂病ではないとするためには」これらの律法のもとにおける審判を「警告」「訓練」として読まねばならないと主張します。しかし、イエス・キリストのもとに神に理解されるひとと律法のもとに神に理解されるひとは異なる実在の層として啓示されており、パウロはそれに対応する言語網は異なる地平にあるものとして論じていますので、そこに矛盾はないのです。

キリストによって切り開かれた新しい現実がなかったなら、そしてアブラハムの信仰を忘れていたなら、ひとは律法のもとに生きるしかなかったのです。キリストは律法を成就し、唯一の義しい物差しでしたが、彼は裁く者ではなく裁かれる者となりました。律法とは別にキリストと共に生きる道が明白に啓示されたのです。もしあの出来事がなかったら、わたしどもは今でも律法に閉じ込められ、裁きあいつつ、優越を競いつつ生きていたのです。キリストの心を心とすることはなかったのです。あの不思議な平安を経験することもなかったでもありましょう。

なお、律法のもとに生きていることの第一の徴である「裁くこと」と日常の生活において不可欠な「識別すること」の相違をパウロは次のように言います。「自ら識別することにおいて自らを裁かない者は幸いだ」。私どもは愛するために、善と悪を識別しながらそして隣人の振る舞いについて識別しながら生きています。キリストを身にあてているときだけ、識別しながらも、裁くことなく、相手に最も必要なことを可能な限り提供することができます。

ナザレのイエスは父なる神の信実に信仰により従順であり続けました。信仰により死に至るまで愛という究極の律法を成就しました。しかし、「罪を知らない」彼は罪人の位置に自ら立ち律法の呪いを受け、わたしどもを「律法の呪いから解き放ち」神との和

解を実現しました。彼は神の前において、信実のもとに生きましたが、神はイエスを十字架につけたとき、律法のもとにあるものとしてそれもわたしどもの代わりとして処刑しました。こうしてのみ罪なき彼は「律法の終わり」を実現しえたのです。この出来事の故に、パウロは新たな律法とも言える命令形を喜びのなかで語ることができるのです。なぜなら律法を成就して義なる方として復活した主と共に生きることができるが故に、律法は満たされうるからです。イエス・キリストの出来事以前の律法と「キリストの律法」は「愛せよ」という内容は同一でも、今は主が共にいたもうという点でそれを確立する歩みの実質は異なるのです。律法を成就したイエスがキリストとして共にいたもうから信徒は「律法を確立する」のです。

カルヴァンは自由な罪の赦し(義認）と倫理的再生（聖化）を分けることはできない。「それはあたかもキリストを引き裂くことだ」と言います。つまり、神の前のわれわれの現実と生身の現実を分けてはならないということです。これは信仰内容として正しいのです。信じるとは復活の主が共にいたもうことを信じることだからです。しかし、私ども個々人が神の前で義とされているかは明白には啓示されていません。神は憐れもうとする者を憐れみ、頑なにしようとする者を頑なにされる方です。しかし、神の自由は御子の受肉に向かいました。イエス・キリストにおいて神が信実であり愛であり義であることが最も明らかに啓示されています。ですから、その啓示の出来事にわたしどもの信仰は集中するのです。そして、生身の自己として一歩一歩自らの自由と責任においてキリストの弟子として共に生きるのです。ここにはマジックはありません。しかし、恩恵が豊かにあることは、その信仰の生を生きるひとには明らかなはずです。信じるしかないことがらはそれと共に生きることのできることがらでもあります。身体の限界が自己であると思っていたときの生とキリストと共に生きる生の差異をパウロは「そのとき汝らはいかなる実を結んだか」と詰問により表現しています。常に神の前の私どもの現実を生身の現実とすることが求められているという意味で、信じることそしてそれにより生きることは実質的なのです。

魂の二重構造

キリストと共にあることを、パウロは魂の構造の分析を通じて明らかにします。魂は二重の構造をしています。福音と神の義の存在証明を６章までで終え、７章で律法の新たな役割を規定します。身体に宿る罪は律法を利用しひとを欺き死に追いやりますが、パウロは律法を罪の自覚を促し、キリストに立ち返らすものとして新たに位置づけます。８章において「罪と死の律法」のもとに「肉に即して歩む」ことと「生命の霊の律法」のもとに「霊に即して歩む」ことを対比し、霊に即して歩む者の神の前の現実を描いています。「肉」は身体を持つものがそれにより生きる自然的な原理であると言ってよい

でしょう。ただし、その自然性は「弱さ」を持つのです。魂は身体を離れてはその機能を遂行できません。魂は、逆円錐形のように、身体を伴いつつ二重底になっておりまして、上部の広い一番底は世界に開かれていて、世界からの刺激に対し記憶や経験や理性を通じて反応する肉によって生きます。ひとが自由と責任のもとに法律・律法制度や政治、経済などの制度そして医学などの学問を充実させ、人間の問題を解決しようとする営みは尊いものです。しかし、もし個々人がその制度や連綿として蓄積されている諸知識に、二番底から愛の業として関わるということがなければ、肉の営みなのです。医学の進歩により心の平安を助ける薬がつくられまた寿命を延ばすことができたとしても、それは神との問題を解決しません。文明の進歩は生の問題を処理するシステムを促進する生の助けではありますが、肉に即して生きることを厚くする営みになりかねません。神への背きである罪の処分はそこでは問題になりませんので、罪の赦しを請うこともありません。私どもは十字架の死をたえず身にまとうことによって、生命のなかに生きるのです。内村が言いますように、「生命は制度を生むが、制度はそれ自身としては生命を生まない」のです。人間の魂の二番底は、そのひとの一切を知り、それも憐れみをもって知ることのできる方、キリストだけが立ちうる場所、生命の泉であります。その二番底は霊であり、ひとは一番底である肉によって歩むか、二番底である霊によって歩むかのいずれかです。キリストと共に霊によって歩んでも、その振る舞いは身体を媒介にしますので、「キリストが汝らのうちにあるなら、身体は罪の故に死であるが、霊は義の故に生である」と言われます。いつも途上でしかありえません。しかし神はその「死すべき身体に、生を賜る」のです。そして二番底から「御霊の初の実」をもつ私どもが身体の贖われることをもとめて、御霊の呻きの執り成しのなかでキリストと共に歩むとき、死すべき身体をも生かされ、その都度その都度聖化の道を恩恵により歩むのです。

福音の健全性

パウロは喜びのなかで「汝らの身体を神に喜ばれる生ける聖なる献げものとして捧げよ」と命じます。私どもの人生を神に捧げたいと思います。イエス・キリストを着て、自らに与えられたそれぞれの賜物を用いつつ、つまり美しい雪のように白いラップに身をつつみ、色の異なるリボンをかけ、自らの最上の贈り物を神様に捧げたいと思います。木はその実によってのみ知られます。聖霊を受けているか否か、つまり槍穴のあいたままの復活の主が共にいたもうかどうかは、愛が出来事になっているかどうかで知られます。ここに福音の健全性があります。聖霊を注がれた者はその果実としての愛、喜び、平和、信実、寛容を歴史のなかに具体的に刻むことでしょう。イエス・キリストにおいてあらわされた神の愛から私どもを引き離すものはなにもないからです。

（注　「『ロマ書』におけるパウロの意味論―ピスティスの二相」（『日本の聖書学』８号　大貫、月本編 2003）などの研究論文が web 上「学術成果コレクション HUSCAP」によりご覧いただけ download できます。